

# 守袋の変遷——懸守から胸守へ——

福田博美\*

## The Change of Amulet Cases

——From Kakemamori to Munemamori——

Hiromi Fukuda

### 緒言

一般に守りと呼ばれるものは、木片や紙片に神名や神のしるしを書いたもので、神仏の力により身を守ると信じられるものの総称である。家の内外に貼りつけるものを御札、身につけるものを御守と区別しており、前者は守りと住生活、後者は衣生活つまり服装との関わりを示すものである。御守を身体に直接あるいは身体を覆う衣服につけるか、何方にしても守りが木片や紙片の状態では携帯が難かしく、袋に入れる守袋として用いられたのである。

本稿は守袋の種類を捕え、首に懸けて着装する懸守と胸守に着眼し、文献・絵画資料を中心に、その変遷について社会的背景と服装との関連性を鑑みて考察することを試みるものである。

### 第1章 守りと守袋

守りの起原については定かではないが、平安時代以来の仏教行事や道教思想との関係から、伊勢神宮の大麻や熊野神社の牛王宝印などが契

\* 本学助手 日本服装史

機となり、多くの神社や仏閣に広まったといわれる。天曆5年(951)源順・大中臣能宣・清原元輔ら撰進の『後撰和歌集』巻第十一戀歌三に、まもりをおきて侍りける男の心かはりにければ其まもりを返しやるとて

伊衡朝臣の女いまぎ<sup>1)</sup>

とあり、平安時代前期すでに守りは恋の願いを懸けるものとして詠まれていたのである。

鎌倉時代に入り建長6年(1254)橘成季著の『古今著聞集』巻第十一(蹴鞠第十七)に、まさしくなぎの葉手にありけり。まもりに籠てぞもたれたりける<sup>2)</sup>。

と記され、守りの古くは自然物であったと考えられる。さらに江戸時代中期、天明7年(1787)釈聖応(南華老人)著『胡蝶庵随筆』には、近世両部習合の神道盛に行れて…略…仏家の祈禱をして、札守を与ふる事も、全く後世の事なり。昔は巻数をのみ願主の許へ贈りし事なり。然るを段々増加して、札守に成たるものなり<sup>3)</sup>。

と記述され、神仏習合により、守りは近世以降札守の形で普及し、今日に至ったものと解されるのである。

守りはその目的・対象・用途から様々な守袋として用いられた。本稿では服装との関係から

特に着装による分類をまとめるものである。

▼着装からみた守袋の種類

〈種類〉	〈袋の位置〉	〈着装〉
懸 守—着衣上に懸ける	}	胸・脇—首に懸ける
胸 守—着衣下に懸ける		
守巾着—帯につける	—腰—	腰に提げる
腕 守—巻きつける	—腕—	身体につける
背 守—縫いつける	—背—	衣服につける

同じ着装の懸守と胸守が、どのように変遷し二分されるに至ったのかを考察したい。

## 第2章 懸守の変遷

平安時代後期、永久～天承年間（1113～31）頃に成る『大鏡』太政大臣兼通に、

とりたまひたりける御ふみを、守のやうに首にかけて、年ごろもちたりけり<sup>4)</sup>。

と記される。守りが首に懸けられていたことは当時の絵巻物『年中行事絵巻』（巻6—19紙）の老女の外出姿にみられ、これは守袋の両端に緒をつけ、着衣上より懸けられた懸守である。

また当時の実物資料として大阪府・四天王寺蔵の懸守7懸が現存し、それらは断面楕円形・筒形（5懸）、断面隅切箱形（1懸）、断面桜花形・筒形（1懸）から成る。図1は高さ7.2cm横8.1cm 胴部に黄地錦と縹地小文錦を貼り合わせ、赤地錦を伏せた上に花菱七宝文の銀台鍍金を据え、両肩には菊花形透彫りの座金に切子台

丸環を設け、組緒が通されるものである<sup>5)</sup>。

平安時代末期～鎌倉時代初期に書かれた『健壽御前日記』では、

守りのふくろ、扇などは、またをりにつけてよきほどにたまはる<sup>6)</sup>。

と守袋は折々の賜物の一つとされたのである。

さらに藤原定家の日記『明月記』の記録にも「所賜護袋二、有緒<sup>7)</sup>」と護袋が賜物であるとされ、緒が有ると形態をしるしている。また『宇治拾遺物語』巻十四の六珠の價、量無き事に、

身をも放たず、守などのやうに、頸に懸けて<sup>8)</sup>と記され、鎌倉時代の絵巻物には多くの懸守がみられ、その特色も様々である。

『北野天神縁起』承久本：巻2—4紙

『一遍上人絵伝』：巻6—3紙

『石山寺縁起』：巻5—6・10紙

『法然上人絵伝』：巻6—8紙，巻9—4・15紙

巻10—27紙(図2)，巻12—22紙，巻33—14紙

『融通念仏縁起』：下巻—17紙

『大江山絵詞』：上巻—6紙

『遊行上人縁起絵』：巻1—2段

『住吉物語絵巻』：2・3・4紙

『松崎天神絵伝』：巻6—15紙

『弘法大師行状絵詞』：巻6—14・31紙

これらにみる懸守は女性または子供の旅装に絞られ、危険の多かった道中の安全を祈り身につけたものである。また室内における姿では、

『一遍上人絵伝』：巻4—2紙

『西行物語絵巻』：巻3



図1 懸守（四天王寺蔵）



図2 法然上人絵伝



図3 稚児観音縁起



図4 鶴岡放生會職人盡歌合

『九相詩絵巻』：生前相  
と何れも女性の胸に懸守がみられる。ところが、  
『春日権現記絵』：巻13-8・12紙  
『稚児観音縁起』：10紙（図3）  
『芦引絵』：巻2-13紙

では元服前の少年の姿において、懸守が首から脇に懸けられている。このことは弘安2年（1799）無住一円の著す『沙石集』巻第二（一）佛舍利感得ノシタル人の事の条に「脇ニカケタル守ノ袋<sup>9)</sup>」と記されることから明らかとなるものである。

続いて室町時代においても『浦島天神縁起』（18紙）では高貴な少年の社参りの様子に、『響田宗庵縁起』（上巻1段）では御殿内の女性に懸守がみられる。またこの時代の特色は職人尽絵巻にあり、『鶴岡放生會職人盡歌合』（四番右）では遊女（図4）に、『建保職人盡詞合』では巫女の図に記されることである。巫女における懸守は、神寄せ・仏下ろしの時、悪霊から身を守るために懸けたものである。

また実物資料には、和歌山県・熊野速玉大社蔵の金銅裝飾包懸守1懸があり、7.3cm大<sup>10)</sup>の筒形で、平安時代の様風を留めたものである。

明応元年（1492）伊勢貞陸著『簾中舊記』御かけ候まぼりの事の項では

廿までは。牡丹めし候ほどは。むねの守こん  
紅梅めしとまりてより。あかぢ。何れも緒は  
豚木にて候<sup>11)</sup>。

と武家社会において守袋の色は年令により定められていたのである。また同著『嫁入記』よめ入の條々には、「むねの守。御かけの事<sup>12)</sup>」とあり、同著『よめむかへの事』にも、「御むねの守。ぬしの御かけ候物にて候<sup>13)</sup>」と記され、婚禮時には懸守が用いられていたことがわかる。しかし江戸時代に入ると伊勢貞丈著『婚禮法式』上巻・婚入之部に、

御料人むねの守かけ候事、えりにうちかけの上にかけれ候、…略…常にはむねの守りはふところの内にかくる也、式正の時はうちかけの上にかくるなり<sup>14)</sup>  
と記されることから、懸守は儀式用となり、そ

れに変わって日常懐に入れられる胸守が懸けられるようになったのである。

### 第3章 胸守の変遷

江戸幕府の開かれた慶長8年（1603）刊行の『日葡辞書』で、守りはMabori マボリの項に、首にかけて持つ守り袋、あるいは、聖なる物を入れた袋<sup>15)</sup>

と記されることから、守りが守袋と訳され、これは、守袋の一般化を意味するものである。

京都の略歴・縦横の町筋・名所等を網羅した貞享2年（1685）板『京羽二重』巻一〇東西洛中〇誓願寺通の項では

はな紙袋 まもり袋 づきん 絹布や<sup>16)</sup>

などが此通諸職賣物としてあげられ、寺社で賜わった守りをこの守袋に入れたものと思われる。

また翌年刊行の奥田松柏軒著『女用訓蒙図彙』巻一産所の項に御符として守袋の図<sup>17)</sup>が記され、安産を祈願して産所におかれたものである。

江戸後期、天保8年（1837）～嘉永6年（1853）に成る喜多川守貞著『近世風俗志』第三十編雜器及囊・胸守の項に、

古は錦等を以て製之婦女専ら掛之神佛守護の靈符を納め衣服の上に緒を首に掛け守囊を胸に當る故に名とす…略…

今世婦女用之は稀にて壯夫下賤の徒掛之中民以上男女不用之婦女小民と雖ども用之甚だ稀とす是は衣服の上にかけず膚或は腹掛の表に掛け其上に衣服を着す緒を右肩に掛る時は守袋左脇左肩に緒をかくる者は右脇に囊あり<sup>18)</sup>

と記され、着衣上、首に懸けられた懸守は、近世以降、着衣下、肌につけるか懐に入れる胸守へと変わるのである。その際、袋が直接胸にあたるのでは動きがとりにくいために脇へ懸けることになるのである。

当世の風俗・世態・人事などを題材として書かれた浮世絵において、胸守及びその緒とみられるものが明和6年（1769）から表われ、明治

時代に至る間様々に変化をみせている。表1からもわかるように、胸守は浮世絵の黄金期、寛政年間(1789~1800)を中心に多くみられ、これに関して当時の洒落本と照合し考察したい。

1. 天明8年(1788) 甘露庵山跡蜂満著『替理善運』(一向不通替善運)  
 こちらの柱のおり釘には遠州緞子の細ながき首まもりが引懸て<sup>19)</sup>
2. 天明9年(1789) 山東京伝著『志羅川夜船』(艶語雑話志羅川夜船)  
 くびにかけたまもりをとってたんすのくわんにひっかけ<sup>20)</sup>
3. 寛政3年(1791) 山東京伝著『仕懸文庫』

(大磯風俗仕懸文庫)

鳥羽瀬のむかふの秋葉さんから出る災難よけの守りさ<sup>21)</sup>

4. 寛政年間(1789~1800) 紅月楼著『仮根草』(奇談仮根草)  
 それならよい御守が赤坂の御やしきからでるに朝夕首にかけさえすればよい<sup>22)</sup>
5. 同年間(〃) 東伝子。旭亭主人著『天岩戸』(滑稽天岩戸)  
 是を見てくだはんせ、守り袋を渡しなく<sup>23)</sup>
6. 同年間(〃) 振鷺亭主人著『見通三世相』(狂言綺語見通三世相)  
 ゑりからわきの下へかけてからすうりのや

表1 浮世絵にみる胸守

年号	筆者	題目	
明和	鈴木春信	艶道増かゞ見(図a)*、鏡臺* 一筆斎文調：二世瀬川菊之丞の玉菊(イ)	図a
天明	勝川春章	婦女風俗十二ヶ月図・四月(図b) 喜多川歌麿：風流花之香遊び・萩寺* 青楼七小町大文字屋多賀袖*	図b
寛政	鳥居清長	美南見十二候七月夜の送り	図c
	細田栄之	青樓美人撰合・床着之図*	
	東州斎写楽	四世岩井半四郎の乳重の井	
	栄松斎長喜	口紅を付ける女*	
	百川子興	おさん茂兵衛(ロ)	
寛政	鳥高斎栄昌	郭中美人競・松葉屋染山* 座敷盆踊、百合*	図d
	歌川豊国	役者舞台之姿絵・わた屋(図c) 時世粧百姿画帖*、時札を反す遊女*、河岸見世(図d)*	
	歌麿	北国五色墨・川岸*、青楼十二時続丑ノ刻*、高名美人六家撰・辰巳路考	
享和文化	葛飾北斎	两国夕涼	図e
	勝川春亭	江戸前大蒲焼・大和田店先(ハ、図e)	
	五渡亭国貞	北国五色墨・河岸* 三ヶ月お仙つぼね見世之図	
文政 明治	歌川国芳	大願成就有ケ滝綺、近江之金女、当世商人日斗計・日七ツ時	図f
	大蘇芳年	魁題百撰相・土屋惣藏(ニ)	
	豊原国周	当勢三十三想・思い切がよさ相(図f)*	
*遊女を対象とするもの			

うな守りのふくろのいとさなだすじかひたるそのねすがた<sup>24)</sup>

7. 同年間(〃)「富か岡の都にすむ流女それかし」著『部屋三味線』

句ひふくろの糸ひもとまもりふくろをすじかひにほねあらはなるむねにかけ<sup>25)</sup>

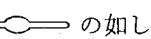
8. 同年間(〃) 関東米著『玉之帳』(玉之幞) ゑりあしの所からゆきのようなむねへかけてかけ香の糸ひも十もんじにかけちがひけんなんよけの守袋とあちに心をどきつかす<sup>26)</sup>

以上の洒落本が遊里での遊興を主な題材としていことから、胸守の対象に遊女が多いことが理解できる。また購買力が絡む浮世絵にとっても人気のある遊女の絵が中心的題材であったため胸守は遊女に多く、胸をはだける姿に胸守をのぞかせ艶姿を表現したものである。さらに禁令を受けつつ普及した浮世絵は、流行の一要因をなしたといえ、胸守においても影響を及ぼした。天明5年(1785)刊の洒落本『酔ヶ川後編真との川』(当世のまゝの川四の巻)に、

此頃は細いものめったにこのみ、まづほそい袖口にはそい胸ひも<sup>27)</sup>

と記され、ほそい胸ひもを胸守の緒と考え、浮世絵を照合すると確かに細いものがほとんどである(表1-図b. 参照)。さらに男性における胸守を捕えると、浮世絵には表1-イ~ニにみられ、明和5年(1768)刊の川柳集『誹風柳多留』三篇に、「守りをばゆこうへ懸る二才客<sup>28)</sup>」とあり、大人ぶって登楼したものの床へ入る時、肌懸けた胸守を取って恭しく衣桁に懸けるしぐさに少年臭が残っていると記されることから男性も胸守を懸けていたとみられる。

表1-図Cの女性は他の女性達と異なり、綿帽子をかぶり大奥か大名の奥向きに勤める者とみられる。そこで幕府の習俗等を記した『千代田城大奥』における守袋をあげると、

錦の切れを袋に製し両端は緋縮緬の紐丸ぐけなり其の形  の如し御臺所の御守は摩利支天鬼子母神等なり女中の物も緞子、錦切の類にて作り多くは鬼子母神、観音祖師等

のお守を蔵す

帯上げに入る守袋は形ち方形にして幅三寸長さ五寸もあるべし地は赤色の錦にて白麻の裏あり<sup>29)</sup>

と記述され、着装は定かでないが胸守の形態を持つ守袋と帯上げに入れる守袋がみられ、後者は緒を必要としない点から守巾着の類いかと思われる。また鬼子母神は産生と保育の神であるところから、女性の守護神として守りを賜わりそれを守袋に納めたものである。

次に洒落本に「災難よけ」「けんなんよけ」と記されるように、守りへの目的は様々みられ、「盗賊除」<sup>30)</sup>(『莫切自根金生木』)「子安」<sup>30)</sup>(『譚話浮世風呂』)「雷避」<sup>32)</sup>(『修柴田舎源氏』)をはじめ『世上洒落見絵圖』では「愛敬の守りや運の守りはまだなこと」とし「老若男女貴賤群衆して参詣する<sup>33)</sup>」と記されている。また文化11年(1814)刊行、萬壽亭正二著『願懸重寶記』○熊谷稻荷の札の項に

この守り札を門戸又は家内にはりおく時は盗難をさくる事うたがひなし又懐になし首にかけ信心するときは道中劍難盗賊のなんにあふことかつてなし<sup>34)</sup>

とあり、当時の旅において胸守は必需品であり、また御蔭参りなどが守りの普及を進めたものと考察される。さらに「けんなんよけ」について『増訂武江年表』巻之九・嘉永六(1853)に、  
○回向院國府のあみだ如來開帳、九月十八日より十月十二日迄三たび始る、劍難除の守をいだし、そのかたわらに鐵砲玉にあたらずとしるせり、異國船渡來せるより思ひよりて此守を出せしなり、浮屠家の貨殖をはかる事、商家にまさりてかしこし<sup>35)</sup>

と記され、ペリー来航により、刃物による劍難に加えて、鉄砲による劍難がみられ、庶民に与えた不安や恐怖感がいかに大きかったか推察される。また守りにより僧侶達が儲けたと記され、これは前掲書『胡蝶庵隨筆』にも、

神人の札守を出す事、全く仏者の真似にして錢貨を貧る事浅ましき事にあらずや<sup>36)</sup>と批判していることからわかるのである。

そして胸守の素材にみられる錦や緞子は、当時の庶民にとって高価で貴重なものであった。その小切れを利用してできる守袋は、守り本来の信仰の意味にも増して、装飾の色合いを濃くしているものと考えるのである。装飾化について井戸文人の著す『日本囊物史』に、

徳川時代になりますと昔の守を着けました精神を失ひ、茲に一種の装飾の如くに心得て紐の代りに銀鎖を付けて所謂伊達者がかけたので…略…之を見えと心得て居りました<sup>37)</sup>。

と記述され、銀鎖の緒に関して浮世絵をみると文化期以降(1804～)に多く、その対象は低級な遊女や血気盛んな男性に限られ、一般庶民の胸守は衰退化したものと思われる。この点について明治32年(1899)発行の都新聞付録『都の華』第廿一號●五十年前の江戸の項に、

▲肌守　ハ今でハ流りませんが、…略…男も仕事師なんかイナセな連中ハ此の肌守を首へ懸けたもので即ち

▲首懸守　だが紐ハ銀鎖で…略…金を此の守の中へ貯へて持つた物です<sup>38)</sup>

と嘉永年間(1848～53)の様子をしるし、胸守は錢入れの役割をも果たすものと化したのである。また前掲書『近世風俗志』では腕守の項に、近年掛守用ふる人あれども漸く先年の如くにはあらず嘉永初比より腕守と云て左腕に巻き置く物を専とす<sup>39)</sup>

と記されることから、胸守は江戸末期に腕守へと変化したのである。

## 結　　言

懸守から胸守への変遷における社会的背景には信仰との関わりがみられ、特に社寺参詣の普及は、守袋の一般化を促すものである。これは懸守が高貴な身分を中心としていたのに対して、胸守は庶民全体に及んでいることからわかり、反面では社寺の経済的支配力の変化をしめすものである。

また身を守る懸守から様々な願いを懸ける胸

守へと、社会の複雑化は守りの目的をも多様化させたのである。しかし、それは大きく次の二つに類別できるものである。

1. 除災…病気・災難・悪霊などから身を守るもの
2. 招福…延命を基に幸福を祈るもの(愛情・配偶者・金銭・仕事等の獲得祈願)

これらが相互に関連し合い細分化するのである。そして守りが守袋を以って対外的に用いられた時、そこには服飾的考慮が払われ、装飾品としての効果を求めるものである。

本稿では述べられなかったが、筒守との関係に疑問が残るところから今後も加筆し、守巾着・腕守・背守についても考察を進め、守袋を総括的に捕えて行き度いと思っている。

## 引用文献

- 1) 塚本哲三編輯：有朋堂文庫、古今和歌集、p. 351、有朋堂書店、1918
- 2) 日本古典文学大系84、古今著聞集、p. 326、岩波書店、1966
- 3) 日本随筆大成編輯部編：日本随筆大成第二期第九卷、p. 137、日本随筆大成刊行会、1974
- 4) 岡一男校註：日本古典全書、第九十五回配本、大鏡、p. 193、朝日新聞社、1960
- 5) 文化財講座：日本の美術11、工芸(染織・服飾)p. 238、第一法規出版、1983(一部引用)
- 6) 玉井幸助校註：日本古典全書、第六十一回配本、健壽御前日記、p. 21、朝日新聞社、1954
- 7) 早川純三郎編輯：明月記、第二、p. 355、國書刊行会、1969
- 8) 野村八良校註：日本古典全書、宇治拾遺物語、下巻、p. 165、朝日新聞社、1954
- 9) 日本古典文学大系85、沙石集、p. 90、岩波書店、1966
- 10) 前掲書5)、p. 242
- 11) 経済雑誌社翻刻、群書類従、第拾五輯武家部、巻第四百十四、p. 676、1952
- 12) 同書、p. 698
- 13) 同書、p. 727
- 14) 伊勢貞丈著：婚禮法式、上巻、帝國図書館蔵
- 15) 土井忠生・森田武・長南実編訳：邦訳日葡辞書、p. 374、岩波書店、1980
- 16) 井出時秀編纂、増補京都叢書、第6巻、p. 11、増補

京都叢書刊行會，1934

- 17) 田中ちた子・田中初夫共編：家政学文献集成，統編江戸期Ⅷ，p. 52，渡辺書店，1970
- 18) 喜多川守貞著：類聚近世風俗志，p. 487，魚住書店，1970
- 19) 洒落本大成編集委員会編，洒落本大成，第14卷，p. 102，中央公論社，1981
- 20) 同書，p. 346
- 21) 洒落本大成編集委員会編，洒落本大成，第16卷，p. 31，中央公論社，1982
- 22) 同書，p. 262
- 23) 同書，p. 332
- 24) 同書，p. 362
- 25) 洒落本大成編集委員会編：洒落本大成，第19卷，p. 79，中央公論社，1983
- 26) 同書，p. 229
- 27) 洒落本大成編集委員会編：洒落本大成，第13卷，p. 83，中央公論社，1981
- 28) 日本古典文学大系57，川柳狂歌集，川柳集，p. 83，岩波書店，1965
- 29) 永島今四郎・太田贊雄著：朝野叢書，千代田城大興，上卷，p. 91，朝野新聞社，1892
- 30) 日本名著全集刊行会編輯発行，日本名著全集，第一期出版江戸文藝之部，第十一卷，黄表紙廿五種，p. 197，1926
- 31) 日本名著全集刊行会編輯発行：日本名著全集，第一期出版江戸文藝之部，第十四卷，滑稽本集，p. 274，1927
- 32) 日本名著全集刊行会編輯発行：日本名著全集，第一期出版江戸文藝之部，第二十一卷，修紫田舎源氏，下卷，p. 610，1928
- 33) 前掲書30)，p. 402～3
- 34) 萬壽亭正二著：願懸重寶記，p. 16，1814，国会図書館蔵
- 35) 廣谷雄太郎編輯：増訂武江年表，p. 265，國書刊行會，1925
- 36) 前掲書3)，p. 137
- 37) 井戸文人著：日本囊物史，p. 67，日本囊物史編纂會，1919
- 38) 都新聞第4273號付録，都の華，第21號，都新聞社，1899
- 39) 前掲書18)，p. 488

#### 図版転載文献

- 図1. 日本の美術 1，装身具，至文堂，1966
  2. 続日本絵巻大成 1，法然上人絵伝，上巻，中央公論社，1981
  3. 日本絵巻大成24，稚児観音縁起，中央公論社，1979
  4. 新修日本絵巻物全集28，鶴岡放生會職人盡歌合絵巻，角川書店，1979
- 表1 図版
- a. 増刊歴史と人物，江戸の二十四時間，中央公論社，1980
  - b. 肉筆浮世絵集成 I，毎日新聞社，1977
  - c. 原色浮世絵大百科事典 8，作品三写楽一北斎，大修館書店，1981
  - d. 浮世絵八華 6，豊国，平凡社，1985
  - e. 『大英博物館所蔵浮世絵名作展』図録，朝日新聞社，1985
  - f. 中野操編著：錦絵医学民俗志，金原出版，1980